

学校を創る

大久保朱乃

北九州市立大学文学部人間関係学科

目次

第1章 目指す学校	2 - 2 プログラムの自主性
1 - 1 『ひらおだい四季の丘小学校』の概要	2 - 3 異年齢
1 - 2 準備段階として	2 - 4 教科がないこと
1 - 3 モデル学校『きのくに』と『サマーヒル』	2 - 5 ミーティング
第2章 『ひらおだい自然塾』での実践	第3章 教師から見た『ひらおだい自然塾』
2 - 1 キッズ・キャンプの概要	3 - 1 保護者の話
2 - 1 - 1 吉野了嗣氏	3 - 2 スタッフの話
2 - 1 - 2 『ひらおだい自然塾』	第4章 考察

はじめに

2002年7月26日に発足した構造改革特別区域制度によって、地域を限定して特定分野の規制を緩和・撤廃することが可能となった。北九州市は北九州ならではの教育を実現するための学校を設立する教育特別区域（以下「教育特区」）を申請し、認可された。特区の名称は「自立と共生の教育」である。教育特区が認可されたことによって教育課程の基準によらず、学校教育法施行規則で定める授業時数を削減したり、総合的な学習（プロジェクト）の時間の授業数を増加することが出来る。2006年4月開港予定の『ひらおだい四季の丘小学校』は、教育特区制度を利用した、全国で初めての試みとなる。

筆者は、ひらおだい四季の丘小学校の助走段階であるひらおだい自然塾の活動にスタッフとして参加し、主に小学生の子どもたちと過ごした。ひらおだい自然塾では、自然体験を中心とした体験学習をおこなっている。

本調査は2004年1月から約1年間、北九州市小

倉南区平尾台にあるNPO法人ひらおだい自然塾（以下、「ひらおだい自然塾」）でおこなった。本論文では、私立・公立小学校に通う子どもたちが、小学校の授業とは極端に異なるひらおだい自然塾で生活し、活動を通して学んでいる様子を記録した。教育特区制度によって公立の小学校よりも学習に様々なアプローチをおこなうことが出来るひらおだい四季の丘小学校が必要とされる背景について触れながら、新しい小学校の可能性を考える。

第1章 めざす学校

1 - 1 『ひらおだい四季の丘小学校』の概要

『ひらおだい四季の丘小学校』は、2006年4月に開校予定の私立小学校である。この学校は、北九州市が承認した「教育特区」の条例を利用する全校区で初めての試みとなる。2000年に設立した『平尾台に新しい学校を作る会』が、行政への具体的運動を検討、開始した。内部では、理事会を構成して隔月（奇数月）に定例会を行い、運営に当たっている。役員の職業は、大学教授、元教師、

少年相談センター職員、NPO法人里山を考える会理事長、法人役員、会社役員、平尾台町内会副会長などである。顧問は『きのくに子どもの村学園』理事長の堀真一郎氏である。

学校の場所は、平尾台にある新道寺小学校の分校で、正式名称を北九州市立新道寺小学校平尾分校という。現在（2004年度）全校生徒は4人で、その内訳は5年1人、3年2人、2年1人である。未就学の子どもは地区内にはいない。2006年4月1日に北九州市から譲渡されることが決定している。

『ひらおだい四季の丘小学校』開校初年度は、4年生までの募集となる。1学年10人を定員とする。小学校開校から2年後に中学校を開校する予定である。現在（2004年1月）小学校の入学内定者数は未定である。入学金は20万円、授業料は60万円、寮費は40万円を予定している。職員の人数は、教員6、校長1、養護1、事務1、寮母3の計12人を予定している。

『ひらおだい四季の丘小学校』の授業時間割の特徴として、「社会」や「理科」といった固定された教科名の授業はない。プロジェクト（体験を通じた学習）、自由選択（音楽、美術、体育、技術、家庭科などの内容を中心にいくつか用意された学習課題を1学期ごとに学ぶ）、基礎学習（国語、算数を中心とした学習）、ミーティング（週1回、学校生活や学習、活動のあり方、問題について全校生徒・全職員で話し合う）を通して生徒が学習していくことだ。北九州市の「教育特区」の特例措置の内容として、教育課程の基準によらない部分がある。学校教育法施行規則で定める各教科の授業時数を6年間で7教科、459時間削減するが、総合的な学習（プロジェクト）の時間の授業数を増加し、授業時数削減のため教科で取り扱わない事とする目標や内容に関する部分については「プロジェクト」において学習する。また特別活動につい

ても授業時数を増加する。以上のことにより、総授業時数が学校教育法施行規則に規定された授業時数を上回る事となる。

クラスは衣・食・住をテーマに3クラスで、1～6年生の縦割り編成になっている。各クラスに2人ずつの担任がつく。授業の中でおこなわれるミーティングでは、子どもが中心になって授業の進行や内容を決める。授業は、学校周辺だけでなく学校所有のバスで県内外へ移動する校外体験学習（日帰り・宿泊）もおこなう予定だ。

原則として全寮制で、週末帰宅制度の完全週休二日制のため、月曜日は11:00登校、金曜日は15:30に下校・帰宅させる。寮は、小学校から徒歩3分の距離にある、現在『平尾台自然塾の家』として使っている。季節休暇は約130日で春夏秋冬4回の中・長期休暇がある。

およその時間割は本稿の最後に載せている。

1 - 2 準備段階として

1 - 2 - 1 『ひらおだい自然塾』

この節では、『ひらおだい四季の丘小学校』の助走段階である『NPO法人ひらおだい自然塾』の存在について詳しく述べる。

『NPO法人ひらおだい自然塾（以下、ひらおだい自然塾）』は、1998年4月に設立された。ひらおだい自然塾は、子どもたちを対象にした体験学習活動を通して『ひらおだい四季の丘小学校』の教職員スタッフを養成している。代表は吉野了嗣氏。子どもたちを対象にした体験学習活動を週末おこなっている。活動の中で子どもの世話をするスタッフはすべてボランティアで、主なスタッフは吉野やす子さん（吉野氏の妻）と鶴村直人氏（保育士）。そのほかのスタッフは大学生や、学生時代に自然塾でボランティアをしていた社会人、活動に参加している子どもの保護者などで、不定期に参加する。

ひらおだい自然塾の活動がおこなわれているひらおだい自然塾の家の窓からは一面を背の低い笹に覆われた丘の中に羊群原が見える。笹は春・夏には緑に、秋・冬には枯れ、視覚で季節を知ることが出来る。毎年野焼きがあり、秋の訪れを知ることが出来る。カルスト台地であるので石灰岩や鍾乳洞がある。平尾台には独特の生態系があり、平尾台にしか生息しない植物がある。ふもとより気温が3度ほど低いので雪が大量に降り、雪を使って遊ぶことも出来る。ふもとには田園風景の広がる苅田町があり、今年は農家の方の協力を得て、田植えから稲刈りまで経験することが出来た。また、付近の施設としてはひらおだい自然塾の家のすぐ下に100㎡ほどの畑がある。今年(2004年)はミニトマトやかぼちゃなどの15種類の野菜を植え、収穫した。ひらおだい自然塾の家のすぐそばにはひらおだい自然観察センターがあり、平尾台の歴史や平尾台に住む生き物について知識を深めることが出来る。ひらおだい自然の里という広大な公園もある。ひらおだい自然塾の家から歩いて15分のところに「秘密基地」と呼ばれる小屋があり、その周りには子どもたち手製のブランコなどの遊具がある。また、自然の中にあるので竹や杉などの材料を得やすい。

現在ひらおだい自然塾では、下記のコースで主に小学生を対象とした活動をおこなっている。

キッズ・パラダイス

毎月第2土曜日にひらおだい自然塾の家に集合し、ハイキングやゲームをおこなう。参加人数は10人程度。費用は2千円。活動時間は10~15時。昼食付き。

キッズ・ファクトリー

毎月第3土曜日に、神理教敷地内に「どんぐり山アンビシャス広場」、またはひらおだい自然塾の家でおこなう。木工や絵画など創作を中心としている。参加人数は15人程度。費用は2千円。活動時

間は10~15時。昼食付き。

キッズ・アドベンチャー

年間固定のメンバーで毎月第4土曜日から1泊2日の活動。ひらおだい自然塾の家に宿泊する。時間にゆとりができるので、基地作りや田植え、稲刈り、ハイキングなど、ほかの活動よりも大がかりな活動をおこなう。参加人数は30人程度。費用は年間で4万5千円。活動日数は合計1泊2日×12回。

春期・夏期の長期休暇には、キッズ・キャンプと呼ばれる1~2週間の泊まりの活動が模様される。参加は自由だが、キッズ・アドベンチャーに参加している子どもの多くが参加する。キッズ・キャンプについては第2章で詳しく述べる。

キッズ・アドベンチャーやキッズ・キャンプでは、いくつかのルールを守ることが求められる。このルールは、ひらおだい四季の丘小学校でも適用する予定である。そのルールをいくつか紹介しておく。

- ・ミーティングは子どもが主体になっておこなう
- ・問題が起きたらミーティングで話し合っ決めて
- ・担当した仕事(ワークやチョイス)は責任を持ってやり遂げる
- ・時間通り行動する
- ・ミーティング中は関係のない話をしない
- ・靴は靴箱に直す
- ・自分の使ったものは元の場所に直す

以上のような規則がある。これらの規則が守られなかった場合は、スタッフが注意する。子どもにやり直しをさせることもある。

上記にあげた活動は、平尾台にあるひらおだい自然塾の家を中心におこなわれる。そのほかの活動は、小倉北区のAIMや、小倉南区の神理教敷地内にある「どんぐり山別荘アンビシャス広場」でおこなわれる。AIMでの活動は月1回行われ、参加

費は無料である。また神理教敷地内でおこなわれる活動は、週に2回程度で参加者の人数は6人程度である。小倉南区にある神理教の代表は自然塾の活動の理解者で、場所や物資、雇用機会を提供している。神理教敷地内にあるしんり幼稚園で、吉野氏は昨年から通園バスの運転手を鶴村氏は保育士として勤務している。

ひらおだい自然塾の設立、運営に関して、代表の吉野氏の存在は大きい。次の節で、吉野氏が新しい学校をつくるに至った経緯などについて詳しくふれていく。

1 - 2 - 2 吉野了嗣氏

NPO 法人ひらおだい自然塾の代表である吉野了嗣氏は(2004年現在)42歳。1998年に吉野氏の妻の古里北九州市に引っ越してきた。吉野氏は北九州での就職先の公務員専門学校で、生徒の父親の行為により会社の事務所を与えられ、フリースクール樟南学園を開校した。高校中退や不登校を経験した20歳までの若者を集めた樟南学園で、問題集を使いながら勉強を教えた。樟南学園の生徒は、通信制高校に在籍し大検を目指す。吉野氏は勉強を教えるだけでなく、朝、生徒の家まで起こしに行くという生活指導までおこなっていた。

吉野氏はフリースクールでの経験を通して、高校で授業について行けないなどの挫折によって不登校になったり、生活に支障をきたす人がいることを知った。その挫折を味わう前に、体験を通して生きていけるようなシステムを作ることが必要だと考えた。その体験とは、自然体験であり、それはゆくゆく、「生きる力をつける学校をつくる」という学校の構想へとつながっていく。

そして1998年、自然塾の設立に至った。現在のひらおだい自然塾などの施設はまだなく、牛舎の寂れた骨組みだけが合った。当時の活動は、平尾台の公民館を借りて遊んだり、ミニトマトの栽培

やハイキングだった。ひらおだい自然塾の宣伝はしておらず、口コミで聞きつけた母親とその子ども10人ほどが集まった。ひらおだい自然塾3年目からは、朝日新聞、毎日新聞などのメディアに紹介された。活動に子どもを参加させている親にとっては、子どもに非日常体験をさせることができ、のびのびできてよいと好評だと吉野氏はいう。

吉野氏は、「公共の学校では多様な子どもを受け入れられない」、「学校という組織がおかしい」ともいう。このような教育システムに対する疑問から、学校をつくろうという考えに至った。現代の学校教育は「覚える」ことに偏った知識偏重主義で、吉野氏の考える「知ろうとする力を育てるために環境を整備する」教育とは対極にある。また、学校教育は能力を相対的に測ることのできる受験が中心になっており、絶対的なものがないがしろにされていると吉野氏は考える。絶対的なものというのは、努力や「何かになりたい」と考える能力だと吉野氏はとらえている。絶対的な能力のある、つまり考え方を形成することのできる人。これが、彼の目指す「生きる力」のある人であり、「生きる力」のある生徒を育てることが彼の目標なのである。

吉野氏がひらおだい四季の丘小学校のモデルとしている学校がある。和歌山県にある『きのくに子どもの村学園』だ。吉野氏がこの学校を初めて訪れたときの印象を聞くと、「これこそ自分が目指すべき教育だと思った」と話した。実践を通しながら学ぶ生徒の様子と学校の理念に共感した。吉野氏は教育実習でもきのくに子どもの村学園を選び、約1ヶ月間を過ごした。

ひらおだい四季の丘小学校はきのくに子どもの村学園をモデルとしており、平尾台に新しい学校をつくる会の理事会やスタッフが視察に訪れている。学校ができた際には、姉妹校として交流をおこなう予定だ。ひらおだい自然塾のルールも、き

きのくに子どもの村学園に習ったものがある。きのくに子どもの村学園はイギリスの『サマーヒル小学校』をモデルにしている。次節でその一連の詳しい説明をおこなう。

1 - 3 モデル学校

きのくに子どもの村学園は、1992年4月に開校した私立の小学校である。理事長の堀真一郎氏は、「教師中心主語」「画一主義」「書物中心主義」を現代学校の代表とし、これらに異を唱える。そして、子どもの自己決定や自由な選択を基本原則とし、画一的な学習内容にとらわれないで、子ども一人一人の個性を尊重し、知識の伝達よりも具体的な生活や創造を媒介にした学習を重視する学校が日本にもほしいという願いから生まれたのがこの学校である。1995年に中学校が開校し、1998年に高校が開校した。

きのくに子どもの村学園があるのは、和歌山県の北東の端にある人口5万人ほどの橋本市という小さな市である。市の中心から約10kmのところ、彦谷村がある。家の数は18軒。実際に人が住んでいるのは11戸にすぎない。学齢期の子どももおらず、学園ができるまでは典型的な過疎の村であった。

きのくに子どもの村学園は1学年15名で、小学校、中学校、国際高等専修学校がある。小学校の条件は次の3つである。

本人が体験入学をした後、入りたいという意志を強く持っている場合

保護者が学園の理念に賛同し、学園の発展に寄与する意志のある場合

以上の条件が満たされたとき、欠員があれば先着順に入学する

従って、いわゆる学力検査による選考はおこなわれない。また前の学校での様子によって選考が左右されることはない。

きのくに子どもの村学園の時間割の大半は、プロジェクト活動で占められる。プロジェクトとは3、4つのグループに分かれ、実践を通して計算、文字、計画、ミーティングなどの力を養うためのカリキュラムである。きのくに子どもの村学園の教育の代表ともいえる。時間割の大部分を占めている。クラスは縦割り、どの子どもも興味のあるグループにはいることができる。半年に1回、グループを変えてよいことになっている。

各学年とも週14時間が、異年齢での体験学習に使われる。学習の大部分が異年齢で進められ、自由選択の時だけクラスが再編されるというシステムである。

2004年6月に筆者は同校を見学した。校舎にはいるとプロジェクトの時間だった。「ひつじファーム」というグループは、直接牧場に行って刈ってきた羊の毛から、枯れ葉などのごみをとりのぞいているところだった。グループの人数は約10人。子どもたちは教室の中で机に座ってプロジェクトの時間を過ごすのではないので、ぶらぶらしている子どももいる。羊の毛には羊からでた脂が付いていて、手をべたべたにしながら作業をしていた。グループにはスタッフが1~2人ついている。羊の毛についたゴミがとれたら、洗って、フェルトにする。その中で、羊や牧場、フェルトの性質への知識を深めていく。このグループは去年もあり、そのグループは調べたことを本にして、校舎の中で売っていた。筆者も作業に加わりながら、小学校2年生の女の子に「1日が24時間で、1日どのくらい遊んでいるの？」と聞くと、「24時間！！」といていた。

ほかのプロジェクトの1つである「料理店」は料理を作り、「工務店」は学校敷地内のログハウスにベランダを取り付けるためにミーティングをしたり、ラジオを作っていた。

小学校の校舎は決して広くないのだが、約90名

の小学生が、お互いに邪魔にならないように休み時間をすごしている。大声や金切り声を出す子はいない。落ち着いた雰囲気だ。問題行動のある子どもなんて 1 人もいないように見える。しかしスタッフの 1 人が、「そばによるとすぐにけんかしてしまう男の子と女の子がいて、この間たまたまバスで近くの席に座ってしまっただ変だったので、ミーティングでその 2 人は離れてのるか、別々のバスに乗ることが決まったんですよ」と話してくれた。

きのくに子どもの村学園ではミーティングがきわめて重要な役割を担っている。ミーティングは、全校生徒と全教師が出席するので、一般的な学校の全校集会のようなものなのだが、中身は大きく異なる。学校をすごしやすくするために様々な問題について話し合うのだ。そこでは大人も子どもも平等に同じ 1 票を持っている。立場も対等だ。議長は子どもが立候補し、複数が名乗り出た場合にはじゃんけんになる。水曜日の 11:50~12:30 をミーティングの時間に当てている。議題は子どもたちが決める。話し合いは納得のいくまでおこなわれる。春と秋の遠足については、行き先、グループピング、付き添いの大人について話し合いがまとまらず、春の遠足は夏休み直前に、秋の遠足は 12 月にはいっていたこともある。遠足だけでなく、修学旅行もミーティングで決める。プロジェクトの時間にもミーティングを活用している。プロジェクトでおこなうこと、材料、進め方を決める。

ミーティングでは時に、大人のほうから話し合っただけを要求する。例えば校舎の真ん中の多目的ホールでのボール遊びだ。一方的に大人から「ボール遊び禁止」と決めたりはしない。共同生活について考えてもらういいチャンスだと考え、ミーティングに持ち出して話し合いを要請する。しかし、開校当初からミーティングがうまく機能していたわけではない。

まず、おしゃべりが多い。それも上級生に目立つ。議論の仕方も実質に乏しい。似たような提案を繰り返したり、他の子の意見の揚げ足を取ったり、手を挙げて指名されると、「忘れた」と頭をかいたり、といった具合だ。また、いくつかの意見が出ると、すぐに採決に走る。そして自分たちの提案が多数を占めると、喜んで手をたたく。「勝った勝った」と喜ぶ。(『きのくに子どもの村』より抜粋)

生徒が教師を「先生」と呼ばず、ファーストネームやあだ名で呼ぶのもこの学校の特徴だ。「ひつじファーム」についていた若い女性のスタッフは、小学生から苗字にちゃん付けで呼ばれていた。時には「おばさん」や「ばばあ」などと呼ばれるが、スタッフはそれについて注意しない。「ひどいね〜」とか、それくらいだ。さん、ちゃんといったものから、ぶー、べえ、じい、「ばけちゃん」なんていう意味不明なものもある。

ニイルは教師は子どもに尊敬を求めてはならないといい、教師に対する恐怖こそは、学校から一番先に追放されるべきものだと言っている。(『きのくに子どもの村』より抜粋)

ニイルとは、『サマーヒル小学校』の校長である A・S ニイルのことである。サマーヒル小学校は、きのくに子どもの村学園のモデルとなっている。堀氏は「ニイル研究会」の代表でもあり、日本のニイル研究の第一人者である。

サマーヒル小学校は、1921 年にドイツのドレスデン郊外のヘレラウにできた新しい学校の一部としての国際学校だった。社会情勢の悪化などで場所を移し、1974 年に学校を現在の場所、サーフォ

ーク州のレイストンという人口 5 千人足らずの小さな町に移した。男女共学の寄宿学校でイギリス本国だけでなく、世界各地から生徒が来ている。

サマーヒル小学校の授業は原則としてクラス単位で時間割にしたがっておこなわれる。クラスは、興味、適正、国籍、発達段階などの応じて柔軟にグルーピングされる。出席は生徒本人に任されている。極端に言えば、何年も授業に出なくてもよいのだ。各クラスは大体年齢別に編成されているが、興味と能力に応じて他のクラスに出てもよい。これは、「自分のことは自分で決める自由」を主張するニールの考え方によるものだ。生徒が時間割にラテン語を加えて欲しいなどの注文をすることもある。宗教教育は一切おこなわれない。授業内容と方法は、それぞれの教師に任されている。生物担当の教師が、野イチゴを摘んでジャムを作ったり、車でその地方の沼や川へ出かけて微生物を採集したりというように、具体的な活動や実験を通して知的な興味を育てている人もいる。学習は、工作、美術、ダンス、音楽、劇などに、国語、算数、理科、社会などの主要と同等の、あるいはそれ以上の重きが置かれる。また、生徒が教師のことをファーストネームで呼ぶのもサマーヒル小学校の特徴だ。

サマーヒル小学校での生活を語るのに、最も重要な活動であるミーティングについて説明する必要がある。サマーヒル小学校のミーティングでは、学内の色々な規則が決定され、その規則は教師にも同じように適用される。教師も子どもも同じ 1 票を持つ。

ミーティングには 3 つの種類がある。通常の全校集会、または定例集会、「法廷」、臨時集会である。定例集会は週 1 回、約 1 時間開かれる。議長（たいてい年長の子、まれに職員）が発言や提案をしたいものに挙手を求める。次に「オンブズマン」が、その週に取り扱ったケースについて報告

する。オンブズマンというのは、子どもたちの間で揉め事が起こったり、苦情が出たりした場合に、調停や助言などをする委員会で、年長生の中から 3 人選ばれる。全校集会で議論するほどではないことは、この 3 人が解決する。

議題は、色々な規則の改廃、規則違反者の取り扱い、学園内の諸問題の処理、行事計画、紛失物を探して欲しいという依頼、職員に対する不満など広範囲に及ぶ。規則違反者の取り扱いについては、「罰則」が与えられるときよりも「警告」ですんでしまうことのほうが多い。むしろ、「警告」すら与えられず、解決してしまうことの方がずっと多い。ミーティングも授業と同じで出席は自由だが、出席率は大変よい。

経営面や安全面に関しては大人が責任を持つ。しかし上記したように、校則や行事は全校集会で決め、子ども同士の揉め事も子どもたちが扱う。ミーティングによる自治が自分たちの生活にとって大きな意義を持っていることを多くの子どもたちが理解しているのだ。

この学校でのミーティングを重要視した考え方に、『きのくに子どもの村学園』理事長の堀氏も、『ひらおだい自然塾』代表の吉野氏も賛同しているのである。サマーヒル小学校の時間割は本稿の最後に記載している。

1 - 4 めざす学校のかたち

ひらおだい四季の丘小学校は、1-3 で説明したきのくに子どもの村学園や、サマーヒル小学校をモデルとした小学校である。ミーティングを重要視し、総合学習によって実践を通して学習する。ミーティングで学校の規則や問題などを子どもたち自身が決めるのはひらおだい四季の丘小学校も同様である。校外学習に関しては、その計画は子どもたちが中心になって立案する。

プロジェクトのクラスは衣・食・住のテーマを基

に作られ、担任が1年間の主な活動を提案し、子どもが活動の中身を理解した上で自分の所属するクラスを決める。どのクラスも1~6年生までの縦割りの異年齢集団になる。教員のほかに特別な技能や経験などを持つ人(専門家など)が子どもたちの活動を支援・補助する。ひらおだいに長年生活してきた人の知恵や、地域社会の様々な分野で活躍している人の特別な技能や豊富な知識などを子どもたちに教えてもらう。

授業の内容は大きく分けて、自然体験活動、体験学習活動の2つに分けられる。自然体験活動は、生命維持の基本に関連したものを中心に、平尾台を学びの場にして活動することをすべての学習の出発点にしている。そこから様々な自称との関連やつながりについて体験を通して総合的に学んでいく。

体験学習活動は、自己決定の原則、個性化の原則、体験学習の原則の3つによって構成されている。従来の教育のすべてを、実践の中で学んでいく教育をめざしている。

自己決定の原則に従って、教育内容や教育方法、評価などを一方的に決めてしまう教師中心主義の教育ではなく、子ども自身の発想や考え方、自己表現、話し合い活動、調査、実験、観察、検証などを大切にする。子どもたちは自らの学習課題を選択し、決定し、探求しながら取り組んでいき、教師はそれを援助する。

個性化の原則に従って、教科書中心の画一的な教育ではなくて、子どもたちの個性、興味、関心に応じて学習内容や学習方法の多様化を図る。そのために伝統的な学年制度や学級制度にとらわれない1~6年生までの異年齢グループ編成を基本として、個別活動や小集団活動、全体活動など柔軟な学習形態を実施する。

体験学習の原則に従って、各教科の枠をはずして、主として衣食住など「生きることそのもの」

に体験学習の基本的な課題を設定する。さらに具体的な学習テーマについて、子どもたちは話し合いで選択、決定し年間を通して取り組む。体験学習を通じて子どもたちは人間の五感を駆使して、生きていくうえで必要な知識や技術、知恵を身につけ、判断力、行動力、思考力、人間関係力などを高めていく。

このように、ひらおだい四季の丘小学校では体験活動を生活と学習の基本にすえている。子どもたちの自己決定と個性を尊重し、感性豊かな知的にも社会的にも自由な人間へ成長することを目的としている。

第2章 『ひらおだい自然塾』での実践

『ひらおだい自然塾』はひらおだい四季の丘小学校の助走段階である。将来小学校でおこなうプロジェクトを行い、ミーティングを通して子どもが主体となった活動を目指している。第2章では、ひらおだい自然塾の活動のうち、キッズ・キャンプについて詳しく述べる。

2 - 1 キッズ・キャンプの概要

キッズ・キャンプは、春季・夏季の小学校の長期休暇を利用した、1~2週間程度の宿泊活動である。平尾台でできる衣食住をテーマにした様々な活動をおこなっている。2004年の春は衣・食・住の3つのグループに分かれ、結婚式をプロデュースした。夏は「ひらおだい自然塾」初の2週間キャンプだった。「生き物(植物・動物)」・「どうくつ(洞窟・鍾乳洞)」・「みち(道路)」のグループに分かれ、実際に自分の足で平尾台を散策し、興味のある事柄について調査した。2004年夏のキッズ・キャンプの費用は2週間で6万5千円。

表1は、8月16日(キッズ・キャンプ7日目)のスケジュールである。表中の「ワーク」、「チョイス」、「ミーティング」という言葉について、2-2

で詳しく述べていく。

2 - 2 プログラムの自主性

『ひらおだい自然塾』の活動を説明するのに欠かせないのは、ミーティングという活動である。ミーティングは学級会議のようなものだが、学校の中でのそれとは大きく異なる。ミーティングによって、活動の内容やルールを子どもたち自身で決めることができる。よって、司会も意見を出すのも子どもたちだ。スタッフは、司会の手助けをしたり、アドバイスをする。

例えば8月16日には、10時から「ワークをまじめにやらない人」について意見を出し合った。ワークとは、朝・夕食前におこなう、掃除や食事の手伝いのことである。子どもたちはあらかじめ、学年や性別の異なった7つのグループに分けられており、7つのワークの内容を毎日順番に担当する。ワークの内容は、外掃除、玄関掃除、広間掃除、食堂掃除、食事の手伝い、トイレ掃除、チェック（掃除ができているか調べる）である。掃除が嫌で、チェックの係りの言うことを聞かずに遊んでいる人がいたので問題にあがったのだ。「どうして掃除が嫌なのか」という司会の問いに対して、「広間は広いから嫌だ」「トイレは汚いから嫌だ」「外掃除はきりが無い」という意見が出た。「みんなが注意してきれいに使えばワークが楽になる」という意見をスタッフが出し、午前中のミーティングは終了した。

また、12時から「海に行きたくない人はどうするか」について話し合った。この日は夕方から海に行くことになっていたが、海に行っても身体的理由で海に入れない子どもや、ぬれたくない子どもがいたからだ。「海に行っても水につからなければいい」など、みんなで海に行きたいという意見に対し、「海に行ったら絶対に水に入ることになる」「傷口をぬらすとしみる」という反対意見も出

てミーティングは長引き、昼食後にもう1度おこなうことを決めて一旦解散した。午後からは、海に行かない人同士で何をするかについて話し合い、ひらおだい自然塾の家に残り、映画鑑賞をすることになった。夕食はチョイスで作ったバン格拉デッシュ料理だった。

チョイスというのは、全員が同じ行動をするだけでなく、いくつかある活動の中から興味のあるものを1つ選んで、決まった時間におこなうことである。活動は、ダンス、サッカー、お絵かき、映画鑑賞、音楽、料理、工作とバラエティがあり、かまどづくりなど日常では体験できない活動もある。チョイスの活動の数や種類は3から5種類ほどで、その日のスタッフの人数によって、スタッフが決めたり、ミーティングで子どもが決める。この日はスタッフが決めた。チョイスの時間になると、黒板に遊びの種類が書かれる。したい遊びの下に自分の名前を書いた順にチョイスの時間になる。

この日のチョイスはバン格拉デッシュ料理、サッカー、お昼寝、ドラム缶で風呂をたく、音楽だった。これからチョイスの様子を1つずつ説明していく。

バン格拉デッシュ料理は、バン格拉デッシュから帰ってきたばかりのスタッフが、トマトを使った料理を教えてくれた。低学年の子どもも包丁を使いトマトの薄い皮をむき、一口大にきっていく。味付けはオリーブオイルと唐辛子と塩で、日本食では味わえない料理に子どもたちは「えーっ、これもいれるの?」と聞き返す。料理が出来上がったらバン格拉デッシュの衣装に着替える。刺繍の細かさにスタッフ一同感心する。男性用と女性用の衣装が1着ずつしかないで、みんな交互に着て写真を撮る。女性用の衣装にはストールがセットになっており、現地ではやっている巻き方を教えてもらった。衣装を着るのは女子のほうが興味を持

ち、洋服のサイズの合わない小さな女の子も、1度着てしまうと脱ぎたくないようだった。料理は、バングラデシュできるように手で食べた。

サッカーは、平尾分校のグラウンドを借りてやる。男子は本当にサッカーが好きで、チョイスになると「サッカー」と意見を出す。キッズ・キャンプでは2日に1度はサッカーをしていた。Jリーグチームのテストに受かったというスタッフもいて、彼が来たときにはチョイスが始まるずいぶん前から「チョイスでサッカーしよう」と誘う。真夏なのでグラウンドは本当に暑く、みな汗びっしょりになって帰ってくる。

キッズ・キャンプが始まって1週間たった頃から、疲れがたまったのか、体調不良を訴えてくる子どもが多くなった。チョイスの昼寝はこういった子どもたちのためである。

ドラム缶風呂はドラム缶を利用した風呂ではなく、直径1メートルのたる風呂の事をそう呼んでいる。この樽風呂は屋外のひらおだい自然塾の家の側面の土手にある。ドラム缶風呂のチョイスを選択した人は、夜の時間に、この樽風呂に入る権利をもらえるのだ。風呂に入るまでの道のりは長い。ホースを使って樽を洗ったり、水をためたり、火加減や湯加減を調節している間にあっという間にチョイスの時間は終わってしまう。うちわで火を仰いでいてさすが樽の中に入ったり、お湯に疲れないほど熱くなりすぎたこともある。しかし、お湯につかればそんな苦労は忘れてしまうらしい。毎回同じメンバーが顔をそろえていた。中には、樽風呂に入りに行くときには下駄をはいていく風流な子どももいた。

「ひらおだい自然塾」の活動には、何かを体験するだけでなく、それに対して知識を深めるための時間がある。夏のキッズ・キャンプは、植物・動物・洞窟・道のグループに分かれ、実際に自分の足で平尾台を散策し、興味のある事柄について調査

した。それが2週間のキャンプのルーティーン・ワークとなった。キャンプの最終日には子どもを迎えに来た保護者を前に、調査の内容を発表した。また、違う小学校に通う同世代の子どもたちが昼夜を一緒に過ごすことは、子どもにとって特別な体験になるだろう。

2 - 3 異年齢

2-1で説明したチョイス、ワークには年齢制限というものが無い。それぞれ子どもが自分の興味なるものを選ぶので、グループはすべて縦割りである。これは「ひらおだい四季の丘小学校」の授業であるプロジェクトにも通じる。朝・夕食の手伝いは、縦割りにされたワークのグループでおこなう。低学年も包丁を使ったり、フライパンに油をしいて目玉焼きを作ったり、揚げ物をする。2週間のキッズ・キャンプの間は、「生き物(植物・動物)」・「どうくつ(洞窟・鍾乳洞)」・「みち(道路)」のグループに分かれ、実際に自分の足で平尾台を散策し、興味のある事柄について調査した。これらのグループも縦割りだ。筆者は「いきもの」グループのうち、動物のほうを担当した。平尾台に生息する昆虫や動物について調べるのだ。平尾台の手作りの地図上に、自分で描いた昆虫や動物について調べるのだ。最終日の発表会のときには、生き物の生息地・生息時期・食べ物を説明した。自分が調べた生き物の役になって劇もおこなった。集まったのは、小学校2~6年生の男の子。なかなか言うことを聞いてくれない。話し合いもままならないまま、初日は平尾台をハイキングすることにした。歩いている途中で見つけた昆虫をその場でスケッチすることは難しいので、ビデオカメラで撮影することになった。6年生にはカメラの使い方を説明し、カメラ係りになってもらうことにした。すると、カメラ係り以外の子どもは自分の見つけた生き物を撮ってもらおうと一生懸命に探し始めた。

生きているものだけでなく、セミの死骸も撮った。「ひらおだい自然塾の家」に帰ってカメラをテレビにつなぎ、スケッチをした。細かい部分は昆虫図鑑で調べた。図鑑に載っていない昆虫は近くの自然観察センターの人に聞いた。

2 - 4 教科がないこと

キッズ・キャン王では「基礎学習」と呼ばれる時間もあった。これは、「ひらおだい四季の丘小学校の授業の中にも組み込まれることが予定されており、国語・算数を中心にした学習のことをさす。まず、体育館の床にテープで描かれた円の中にスタッフがカードをちりばめた。1つの円を5人程度の1~3年生が囲む。合図と同時にいっせいにカードを数える。1回目は一人一人ばらばらになり1枚ずつ数えた。数えきって並べたカードを別の人が数えるなど無駄が多く、報告してきた枚数は答えをかなりオーバーした数に膨れ上がっていた。2回目は、10枚ずつ束ねると数えやすいことに気づいたグループもあり、円の中に束がきれいに並んだ。

小学校全学年が取り組んだ基礎学習の1つに、キッズ・キャンプ参加者全員の年齢を足し算するというものがあった。人が被らないように、年齢と一緒に名前を尋ねる。長い足し算に、低学年はだんだん自信をなくしている子もいた。高学年は学年ごとの人数を調べ、「1年生は7歳」とし、掛け算をしていた。この足し算に答えは用意していないので、女性スタッフは年をごまかしたりする。友達の名前を5人書き出し、その漢字を使って例文を作ることもおこなった。

また、6人程度のグループに分かれ身長を足し算もした。自分の身長を知っていて、紙の上で足し算することもいたが、体育館に列になって寝そべり、長い巻尺で計るほうがずっと楽しそうだった。正確に測るには、巻尺がたるまないように注意することが必要だ。測られるほうも頭と頭、足の裏

同士をきっちり合わせじっとしていなくてはならない。

学校のように教室の中で教科書を使っておこなう授業とは異なり、身近なものを使ったり、実践することで計算や作文について学んでいくのが、「ひらおだい自然塾」のやり方だ。

2 - 5 ミーティング

ミーティングはキッズ・アドベンチャーやキッズ・キャンプのときのみおこなわれ、1日1,2回おこなわれる。ミーティングはスケジュールに元々組み込まれているものではない。必要に応じておこなう。司会を担当しているのは小学校中学年を中心に結成された「ミーティング委員会」だ。ミーティングの間はスタッフの鶴村氏が司会のそばにいて、司会を助ける。議題は、「今夜の上映会でどの映画を見るか」「掃除をしない人についてどうするか」「布団置き場で遊んで散らかすことについてどうしたらよいか」などで、自然塾での活動に関わることが多い。議題は大人たちが用意する。ミーティングの終盤には多数決が取られ、人数の多い意見のほうに決まる。決が半々に割れたときには、スタッフが人数の少ないほうの意見を聞くことを司会に促すこともある。

「ひらおだい自然塾」に集まる子どもたちは、普段公立や私立の小学校に通い、公共教育を受けており、ミーティングにはなじみが薄い。そんな子どもたちが着き1階の「ひらおだい自然塾」の活動に参加するのだ。ミーティングのルールがなかなか浸透しない。低学年はそわそわし、友達同士でおしゃべりする。小学校に上がっていない子どもたちは走り回っている。「(司会や発表者の)声が聞こえない」「司会が遊ばんで(遊ばないで)」「手え挙げてるって!(意見を言うために手を上げているのに司会が気づいていない)」。ざわざわしたミーティングに対して「うるさい!」とヒス

テリックに叫ぶ子どももいる。

「ミーティングで多数決にこぎつけるまでもにずいぶん時間がかかる。多数決は子どもたちに分かりやすい方法でミーティングの結果を示してくれる。今は俺がルールを決めてやらないと時間が足りない」と吉野氏は話す。ミーティングで話し合いをすることは子どもたちにとってとても難しいことのようにだ。

第3章 教師からみた「ひらおだい自然塾」

自然塾の活動に子どもを参加させる親の職業として、教師は3分の1を占める。公立の小学校とは正反対の性質を持つ「ひらおだい自然塾」を教師はどんな目で見ているのだろうか。第3章では職業が教師である「ひらおだい自然塾」に子どもを参加させている保護者と、同じく保護者でもありスタッフでもある方に話を聞かせてもらった。

3-1 保護者の話

自然塾に2人の子どもを約2年にわたって預けている保護者に話を聞いた。両親とも教員だ。話を聞かせてくれたのは彼女たちの母親のほうだ。北九州市の三郎丸小学校で5年生を担当している。自然塾の活動について尋ねると、「自分が子どもだったら行きたい」と話す。しかし本人は多忙なため、自然塾に見学に来たことは無いという。子どもは現在、小学校2年生と6年生。2人とも女の子だ。2人は頂吉(かぐめよし)少年自然団に所属しており、年に3~4回、1泊2日の活動に参加していた。活動内容としては、陶芸や沢登、福知山登山などの野外活動を少年自然の家が主体となりおこなう。今年は1回も参加していないという。それは子どもが「自然塾のほうが楽しい」というからだ。

自然塾のよい点として、自然活動があり、走り回れて、家庭ではできない体験ができるところや、

頂吉少年自然団とは異なり活動に選択肢があることを挙げている。子どもが帰ってきたら「楽しかった」と活動について話してくれるので不満は特に無いという。また、家から近いモノレールの駅までバスで迎えに来てくれるので、便利なので預ければなしになるともいっていた。

公立の小学校の指導要領には、総合学習の時間が年間110時間(5年生)与えられている。そのうちの35時間は用途が決まっており、英会話20時間、パソコン15時間となっている。三郎丸小学校の今年の5年生は、その残りの総合学習の時間で農業や学外での体験学習をおこなっている。1学期は稲を育てた。花壇の土を掘り返し、水田を作って、農家からもらった苗を植えた。農家の人を招き話もきいた。「自分で考えて欲しい」という思いから、もみすりの方法は宿題にした。「収穫の後は残ったわらで輪締めを作るところまでやりたい。」2学期は、地域の保育園、デイサービスセンター、聾学校、作業所、また学校内の養護学級に児童を預け、計3回の体験学習をおこなう予定だ。自分と違う環境の人々とのコミュニケーションが目的だ。現在、1回目を終えた時点での児童たちの感想は「楽しい」というものだったが、「もっと困って欲しい」と彼女は言う。「困ったときにどんな工夫をして解決したか、どうして困難を感じたのか、感じ、体験したことを教室に帰って発表することで表現力が養われる」。教室の外での体験こそが学習につながると考えている彼女は、その考えを学校の授業の中で実践させたいと考えている。

3-2 スタッフの話

ひらおだい自然塾のスタッフであり、現在長尾小学校の教諭をしている岩田さんに話を聞かせてもらった。彼は仕事や、学外での活動が忙しく、2,3ヶ月に1回の割合で参加している。高校を卒業してからサラリーマンをして、通信で教員免許を

取った。6年前に新聞できのくに子どもの村学園の記事を読んで興味を持ち、見学に行ったときにひらおだい自然塾の存在を知ったという。ひらおだい自然塾を訪れたのは3年前。当時は「大人の自然塾」という自由教育についての学習会があり、それに参加したのが最初だった。

「ひらおだい四季の丘小学校」の職員になるのかとたずねると「10年後くらいに自分で小学校を作りたい」という。「教師生活を12年やってきて、初等教育の大事さを実感した」そうだ。岩田さんは、規則が多く、教え込むことが中心で、日本全国一律の現代の教育では、できないと考えている。今の日本に足りない表現力、想像力、自己主張の力が育たないのは、子どもが受身になる公共教育が原因だという。また、教師の目におびえ、それが見えないストレスになり、いじめや問題行動につながっているともいった。

岩田さんは、先日1週間学校を休んできのくにに見学に行った。そして、きのくにで公共教育に足りないものを見出した。「きのくにの教育が万人に適したものだとは思われないが、個人的にはいいと思う」。岩田さんの理想は、小学校3,4年生のギャングエイジを持つような子ども本来の素直さや、人に対する信頼感のある大人だ。きのくにや自然塾は、規則が無いのに等しいので、それをはぐくめる雰囲気があるという。

現在、ほとんどの小学校が教科書をもとにして授業をおこなっている。その点では公立も私立も同じだといってよい。きのくにのような学校は、初等教育に新しい選択肢を与えるとともに、「詰め込みだけが教育ではない」ということを世の中に知らしめていく役割があると彼は言う。その流れは、一般の学校の教育をも変えてしまうかもしれない。

経験主義に偏ると知識が乏しくなり、系統的教育に偏っては詰め込み教育になってしまう。理想

的な教育はこの2つの間で振り子のようにゆれているのが現状だ。岩田さんは、理想的教育のかたちを見出すために、平尾台で試そうとしている。

第4章 考察

国公立の学校は行き詰まりを感じているのだろうか。どちらにしろうまく機能していない部分があることは否めないだろう。不登校の定義である「学校を30日以上連続して休んでいる」に当てはまる児童生徒数は4万9352人にのぼり(2004年文部科学省調べ)増加の一途をたどっている。実際はこの数字よりも多い人数だと予想できる。「保健室登校」や「適応指導教室」などに通えば出席扱いとする学校が多数あるためである。実際に授業を受けて集団生活を送らなくても欠席扱いにはならない。

第3章で話を聞いた教師は、ひらおだい自然塾の関係者なので身内の意見だとも言える。第1節の教師は、学校を教養を身につけさせる場以上のものだと考えている。総合学習の時間の用途は実践やコミュニケーションを通したものを提案し、日常生活ではなかなか体験できないものだ。彼女は小学校での教育の限界をよく知っているからこそ、頂吉少年団やひらおだい自然塾の活動に興味を持ち、子どもを通わせているのかもしれない。それは、ひらおだい自然塾に子どもを通わせている保護者の3分の1が教員ということも関係すると考える。第2節の教師は、学校の教育の知識の教え込みではなく、表現力、想像力、自己主張の力のある子どもを育てようとしている。それは彼の言葉を借りれば「子どもが主役の教育」で、それを実現させようとしている。

「ひらおだい四季の丘小学校」はイギリスのサマーヒル小学校、和歌山のきのくに子どもの村小学校をモデルとした学校である。個々では、従来の公共教育よりも、教師にとっても子どもにとつ

でも自由な教育が実現しようとしている。教育特区の法律改正がなされたのは、保護者の要望、教師側の希望、また、不登校者数のデータによっても明らかにされている、学校の中で子どもたちが生活しにくくなっていることを考慮すると当然の成り行きであろう。

教育特別条例改正、「ひらおだい四季の丘小学校」の開校によって様々な教育理念を持つ学校が生まれ、多様な子どもたちを受け入れられる多様

な学校が生まれていけばよいと考える。

参考文献

- A・S・ニイル著 霜田静志・堀真一郎共訳 1974
「ニイルのおばかさん」 黎明書房
- 堀真一郎 1994 「きのくに子どもの村 私たちの小学校づくり」 ブロンズ新社
- 堀真一郎 1999 「ニイルと自由な子どもたち」 黎明書房

表1 「ひらおだい自然塾」キッズ・アドベンチャーのスケジュール

1日目

9:00	自然塾のバス小倉駅発 (国道 322 号線沿いに参加者を拾う)
10:00	バスがひらおだい自然塾に到着 (今日の活動の説明など)
10:30	午前の活動開始 (ハイキング、基地作り、基地作りの話し合いなど)
12:00	昼食
13:00	午後の活動開始 (午前の活動の続き)
15:00	おやつ
15:30	チョイス (スタッフが 3,4 つある活動を黒板に書き出し、子どもたちは興味のある活動の下に自分の名前を書いて選択する。活動にはダンス、サッカー、お絵かき、かまど作り、映画鑑賞、音楽、料理などがあり、それらは参加しているスタッフによって直前に決められる。子どもからスタッフにリクエストすることもある。)
17:00	ワーク (あらかじめ子どもたちを 7 つのグループに分けている。順番で毎月違う仕事をする。仕事の内容は大きい部屋、トイレ、台所、お風呂、玄関、バスの 6 箇所の掃除である。また、「チェック」という係りが、掃除の監視と掃除が出来ているか調べる)
18:00	夕食
19:00	お風呂
20:00	自由時間 (風船遊び、読書、トランプ、囲碁など)
21:00	就寝(何時に寝るかは現在ミーティングで議論中)

2日目

7:00	起床
7:30	ワーク (仕事の内容は、布団の片付け、外掃除、朝食作り、食堂掃除など。1日目のワークとは違う内容)
8:00	朝食 (パン、目玉焼き、ジュース・牛乳、ソーセージなど)
9:00	午前の活動(1日目と同じ活動はしない)
12:00	昼食
13:00	午後の活動
15:00	おやつ
15:30	解散